【地域と歴史科学】第２回報告

我々の地域史研究の課題

―地域の歴史的断層構造と連続構造―

内田修道

(一)

私が《地域》について正面に据えて考えだしたのは「神奈川県史を学ぶ会」が発足した頃（1984年3月)であった。第一回自由民権百年全国集会で受皿組織として結成された神奈川実行委員会の主要メンバーは、全国集会以後このまま受け皿で終りたくないという強い願望を持っていた。私もその一人で、実行委員会の事務局長として数度にわたってフィールド・ワークや学習会を企画実践してきた。しかし自分自身納得できるものではなかった。今から思えば、全国的にで展開されていた地域の民衆史掘りおこし運動に万分の一でもちかずきたいという願望のもとに、その運動の形式的な摸倣を志していたに過ぎないといえる。はっきりした課題・方法が認識できず、従って会の活動も先細りとなった。第二回の全国集会が迫るにつれて気ばかり焦った。そうしたとき、１９８４年の１月神奈川地域史研究会発会式における古島敏雄の講演「神奈川県の現状と地域史の問題点」(『神奈川地域史研究』創刊号所収、1984.10)を幸いにも聞くことができた。

古島は「今、眼前で進んでいる変化は戦後の財閥解体、農地改革、その他教育改革という……大変化を遂げた時期よりも大きな変化を経済面ではしている」と指摘しながら「神奈川県で地域の問題を考える上で重要な基礎」として「外部からの流入人口によって人口がふくらむことの著しい点」を強調した。外部から流入した新住民と地域史研究との係りが古島講演のテーマであった。

古島は城山町や秦野市の例を挙げながら「そういった人たち（＝新住民）が多くいる地域で地域の住民は自分の住んでいる場所をどのようなものとして考えているか」を問う。そして、ひところジャーナリズムを賑わしたルーツ流行りの例を挙げて、「アメリカの黒人にとって今、歴史的な大事件は何か」それは汚辱とそれからの開放の歴史である。「ところが……自分のうちは黒人だけれども、どこそこの種族の酋長の子孫だという話が入ってきたらルーツさがしは今抱えている問題をごまかすためのものになってしまう」と強調する。さらに神奈川県の人口は８０％が外部から移住した人々であり、大規模開発された造成地へ移住したこれらの人々にとっての歴史は「決して後北条氏の研究になるとか、東海道の研究になるとか、横浜の開港の研究になるはずがないのです」と論じ、さらに現在秦野市史に関係している自分の仕事にふれて、次のように述べた。「今の人たちにも注意を向けてもらえるのは、新しい市民がいつ、なぜ、ここへ来るようになったかという、振り返れば自分自身の身につまされるような思いをして、また亭主に長い通勤時間を使わせ

ている現実についてである。そして自然が少し残っているといって楽しんでいるうちに、自然がどんどんなくなってゆくという姿、それに対し何かを感じている。それに幾分か応えるものになるのではないか。そういうつもりで史料集をつくり通史を書こうとおもっている」。

古島講演は現代の地域住民の抱えている問題関心、あるいは置かれている状況を欠落させた、即ち、地域の形成主体を欠如させた地域史研究に対する厳しい警告であった。この講演は《地域》となかなかまともにむかいあうことができなかった私にとって大きな衝撃であった。北海道を始めとして全国で展開されていた地域の民衆史掘りおこし研究運動―民権百年の運動の支えとなっている《地域》を、一方で眩しく思いながら、他方で何か違うと感じていた私にとって《地域》とまともにむかいあう転機となった。ここで気付いたことは地域の民衆史掘りおこし研究運動で成果をあげている《地域》と東京・横浜といった《大都市》との相違であった。

(二)

自由民権百年の記念運動に先行する歴史学習運動として、〈国民的歴史学運動〉があるが、《地域》という概念が戦後歴史学習運動でどのように意識されてきたかに興味を持った私は、この〈国民的歴史学運動〉の末期に刊行された『講座歴史Ｉ』(１９５６年刊)を期待を持ってひもといた。

「『国民的歴史学』の批判と反省」の章に、中塚明「村の歴史・工場の歴史の反省」、奥田修三「歴史のサークル運動について」の論文があった。しかし、この両論文とも全く期待を裏切られた。もっぱら専門研究者とアマチュアとの関係、研究と啓蒙との関係にしかふれていなかった。『歴史地理教育』をみて、地域の変革とその担いての形成にかかわる歴史意識の変革を運動の中心に据えていたのは歴史教育者協議会であること、また、その理論と実践に先導的役割を果たしたのが１９６０年の後半に地域社会史論を提唱した愛媛近代史文庫と愛媛歴教協であることを知った。地域の独自性、主体性と普遍性を統一的に把握しようとするこの方法は、やがて歴教協が掲げた「地域に根ざし、人民のたたかいをささえる歴史教育」のスローガンに生かされ、地域の民衆史掘りおこし研究運動の大きな成果を産んでいった。とくに北海道において、逃亡をつづけていた自由民権家の掘り起こしから始まり、囚人、タコ労働者の犠牲者、アイヌ、朝鮮人、中国人などの民族的犠牲者へと近代百年を掘りすすみ、地域の歴史にひそむ近代百年と対面し、自己の歴史意識の変革を実現した。そこに見られる特徴は、掘る主体と掘られる側とが歴史的に人・物と連続する関係、また、そのために掘る行為が自己の過去及現在とを問う関係を成立せしめていることである。(※①)

地域の民衆史掘りおこし運動で成果をあげている《地域》は、まさにこの《地域の歴史的連続構造》という特色を持っている。もし掘りおこし運動が自由民権で完結してしまうなら、それは現代の人々の歴史意識を問うことはできないであろう。北海道には民権で完結しない歴史的現実があった。私が以前何か違っていると感じていたのは、まさにここであった。

(三)

ところで、愛媛近代史文庫・愛媛歴教協が提唱した《地域》論を東京がどう受けとめたかを示す例として、１９７０年の歴教協全国大会の報告―寺沢茂「東京をどう教えるか」(『歴史地理教育』１７７号) ―がある。寺沢はこの報告のなかで「地域人民のたたかいをほりおこし、歴史的に明確にすること、そして、これを教材化し、未来への展望を科学的に組織的にたかめていくこと、これが地域をどうとらえ、どう教えていくかということの重要な観点となる」と前置きして、次のように主張する。「東京に住み、東京に働く人々があまりにも東京の実体を知らないという事実をまず認識する必要があろう。これは他の地域に比べきわだった特徴点ではなかろか……東京に住み、東京に働く人たちが東京こそわれわれの生活の場であり、原点であると確信していくために、まず東京を知るべきではないか、『東京をどう教えるか』というテーマにとりくみはじめたそもそもの理由は、ここにあった」(―線引用者)。以下、人民の闘いの遺跡、差別、公害などを列挙している。寺沢は「他の地域に比べきわだった特徴点」に気付きながら、これを放置して、「東京を知る」方へ視点を移行させてしまう。

一年後の大会報告―「地域史と市町村史」(『歴史地理教育』１９３号)で北海道の榎森進は次のように主張している。「我々が地域から『人民の歴史を掘りおこす』といっても単に百姓一揆や小作争議あるいは労働運動というものに目を向け、それをアトランダムにとりあげていったとしても、地域人民の総合的な歴史像を把握できない。……こうした観点に立てば山村地帯や小漁村部での比較的『闘争』の少ないところには人民の歴史がなかったというような自己矛盾におちいる……。我々がとらえようとする地域史とは決してそのような安易なものではない。歴史把握の視点を歴史をつくる主体としての人民の成長過程に置くけれども、それは単に地域人民の諸闘争をピックアップするのではなく、それを規定している政治経済体制というものを正確に分析し、地域の構造を充分にとらえ、体制的な矛盾と階級的矛盾さらには地域独自の矛盾を統一的にとらえ、その中で人民の諸闘争のみならず、地域住民の生活や日常的要求などを構造的にしかも動的にとらえていくことだと思う」。榎森の論理は明晰である。東京のような大都市を把握するにはこうした方法的自覚と「他の地域と比べきわだった特徴点」を明らかにすることが「東京をどう教える

か」の大前提であろう。

地域の民衆史掘りおこし運動成立の条件であった《地域の歴史的連続構造》が大都市には全く欠如している。前述した古島講演にあったように神奈川の住民も大部分が浮遊民でなのである。住むところと働く所が一体性を持っていないこと、また、何時でも他地域へ移動しなければならないこと、これが大都市住民とその地域との関係を希薄にしている。換言すれば、《地域の歴史的断層構造》が大都市の特色である。

(四)

《地域の歴史的断層構造》と《連続構造》一大都市と農村一後者は地域の民衆史掘りおこし研究運動として一定の成果をあげてきた。しかし、前者はまだその方法をもっていなし、しかも、ますます前者が後者を圧倒している。神奈川一特に京浜地域は幕末開港以後現代に至るまで従来の歴史的連続性が何度も切断されてきた。我々京浜歴史科学研究会の対象はまさに《歴史的断層構造》をもつ《地域》なのである。

幕末以来、民衆が持っていた地域の「自治」は天皇制国家によって剥奪、再編され、擬制的な共同体的関係が長らく維持され、こうした状況からの開放がどれだけ渇望されてきたことか。そこからの開放が自由で主体的な個人の誕生としてどれだけ熱っぽく語られたか、思い起こす必要がある。しかし、現在はどうであろうか。共同体的しがらみからの開放は新たな自由で主体的な諸個人の関係を生み出したであろうか。文化講演から草野球に至るまですべてにおいて国家・資本によって組織化されている。カルチャーセンター式の教養のパック販売には共同と連帯をつくりだすことができず、資本に従属・編成替され、崩壊しつつある《地域》の姿を象徴しているようである。前述した古島講演はこうした状況に対する危機意識に根ざしているように思える。我々は、ここに至って漸く問題の入口に気付いたにすぎず、しかも、《地域》の崩壊はのっぴきならぬ局面に立ち至ったように思える。我々の地域史研究が《地域》の再構築の叡智になりうるためには、ここからどのように研究し、それを運動として展開できるか、我々の課題はとてつもなく大きく、我々に迫っている。

※①北海道の運動は小池喜孝監修・オホーツク民衆史講座編『民衆史運動一その歴史と理論一』１９７８年刊に集大成されている。

※②本稿は『京浜歴科研会報』第１７号、1985年4月15日所載に一部加筆、修正したものである。